

CALENDRIER 上映スケジュール

3月16日(日)	14:30	Wow Wow (95分)
	16:30	C.R.A.Z.Y. CRAZY. (127分)
4月12日(土)	14:00	キング・オブ・エスケープ <i>Le Roi de l'évasion</i> (93分)
	16:00	湖の見知らぬ男 <i>L'inconnu du lac</i> (97分) *上映後、大寺真輔によるレクチャーあり *suivi d'une conférence de Daisuke Odera
5月10日(土)	14:00	壁にぶつかる頭 <i>La Tête contre les murs</i> (95分)
	16:00	燈台守 <i>Gardiens de phare</i> (82分) *上映後、大寺真輔によるレクチャーあり *suivi d'une conférence de Daisuke Odera
6月14日(土)	14:00	公共のベンチ(ヴェルサイユ右岸) <i>Bancs publics (Versailles Rive-Droite)</i> (115分)
	16:30	7月14日の娘 <i>La Fille du 14 juillet</i> (88分) *上映後、大寺真輔によるレクチャーあり *suivi d'une conférence de Daisuke Odera

★入場料金 一般:1,200円 アンスティチュ・フランセ会員:600円 芸大生無料  
(同日2本目は一般:600円)

★チケット販売:当日会場(東京芸術大学馬車道校舎)にて開場時より販売  
\*開場は各回30分前より。1本目と2本目のチケットを同時にご購入いただけます  
\*当日券のみ、前売券の販売はございません \*整理番号順でのご入場・全席自由席  
\*場内でのお食事はご遠慮ください

Tarifs d'entrée aux projections :  
Adhérents 600 yens, Non-adhérents 1200 yens, 600 yens pour la 2ème projection de la journée.  
Gratuit pour les étudiants de l'Université des Beaux-Arts de Tokyo.  
Les billets sont mis en vente 30 min avant chaque séance. Ouverture des portes 30 min avant la séance.

東京芸術大学馬車道校舎 〒231-0005 神奈川県横浜市中区本町4-44

Ligne Minatomirai BASHAMICHI 馬車道 馬車道駅出口5 Sortie 5 県立歴史博物館 Rue Bashamichi	LAWSON 東京芸術大学馬車道校舎 Univ. Geidai Campus Bashamichi 地下鉄副都心線出口9 Sortie 9 du Métro Kannai	関内大通り Avenue Kannai 国道133号 Route133 国道16号 Route16
Royal Host アンスティチュ・ フランセ横浜 L'INSTITUT	地下鉄副都心線出口7 Sortie 7 du Métro Kannai	横濱市役所 Mairie de Yokohama JR 関内駅北口 Sortie Nord JR 関内 KANNAI
← 荻原町 En direction de Sakuragi-cho		荻原町 → En direction de Ishikawa-cho

「第17回カイエ・デュ・シネマ週間 in 横浜」

主催:アンスティチュ・フランセ日本  
助成:アンスティチュ・フランセ パリ本部  
フィルム提供・協力:在日カナダ大使館、カナダ国立映画制作庁、ケベック州政府在日事務所、NFB/ONFドキュメンタリズム実行委員会、  
合同会社TRIPOD 本田真也、東京国立近代美術館フィルムセンター、エセック・フィルムズ、東京国際映画祭、レ・フィルム・デュ・ロザンジュ  
後援:横浜市文化観光局

17èmes Semaines des Cahiers du Cinéma à Yokohama  
organisé par l'Institut français du Japon  
avec le soutien de: Institut français, la Ville de Yokohama  
en partenariat avec l'Ambassade du Canada, l'Office national du film du Canada (ONF), Délégation générale du Québec à Tokyo,  
Canadian Docu Days, Tripod Ltd, Liability Co., Masaya Honda  
merci à: National Film Center, Ecce Films, Tokyo International Film Festival, Les Films du Losange

お問い合わせ:  
アンスティチュ・フランセ横浜(旧 横浜日仏学院)  
〒231-0015 横浜市中区尾上町5-76 明治屋尾上町ビル7階 Tel: 045-201-1514 / yokohama@institutfrancais.jp www.institutfrancais.jp/yokohama

INSTITUT  
FRANÇAIS



uniFrance films



agnès b.

17èmes Semaines des  
**CAHIERS  
DU  
CINEMA**

Les 16 mars, 12 avril,  
10 mai, 14 juin 2014  
à l'Université des  
Beaux-arts de Tokyo,  
Campus Bashamichi

90

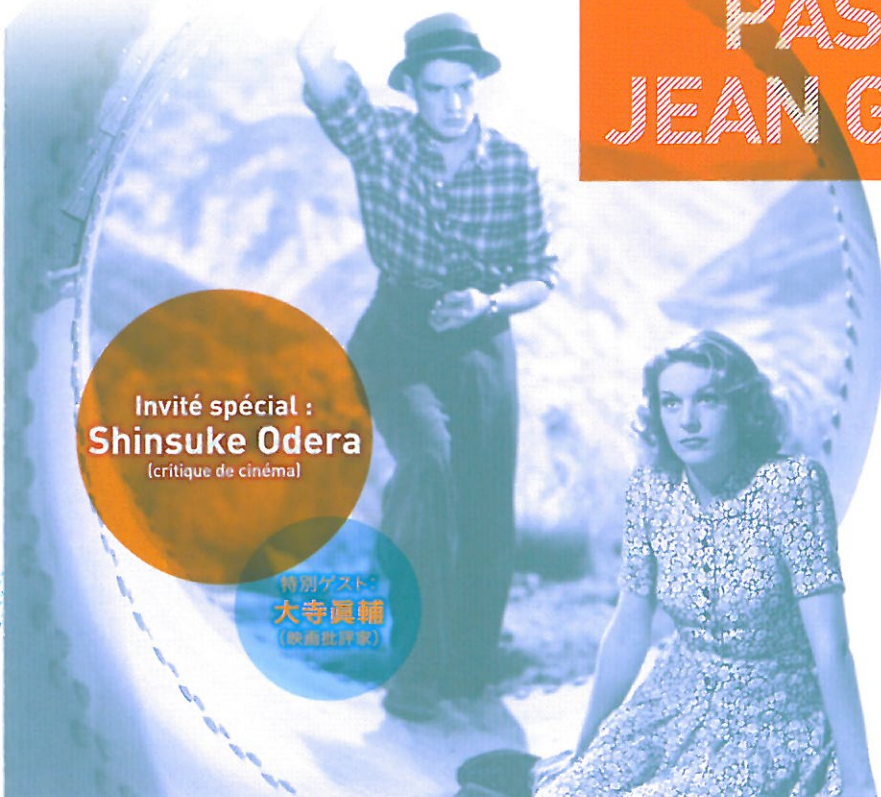
1924-2014

90<sup>th</sup> ANNIVERSAIRE  
DU PARTENARIAT  
CULTUREL  
FRANCO-JAPONAIS  
法日文化協力90周年



**JEUNES CINÉASTES FRANÇAIS,  
ON N'EST PAS MORTS!**

**PASSION POUR  
JEAN GRÉMILLON**



Invité spécial :  
**Shinsuke Odera**  
(critique de cinéma)

特別ゲスト  
**大寺真輔**  
(映画批評家)

第17回  
カイエ・デュ・シネマ週間 in 横浜  
2014年3月16日(日)・4月12日(土)  
5月10日(土)・6月14日(土)  
会場:東京芸術大学馬車道校舎

INSTITUT  
FRANÇAIS  
アンスティチュ・フランセ横浜  
JAPON-YOKOHAMA

17<sup>èmes</sup> Semaines des **CAHIERS DU CINEMA**

今回で17回目を迎える「カイエ・デュ・シネマ週間」は、新世代の才能溢れる若い監督、俳優たちにフォーカスして最新のフランス映画をご紹介します。新しい作風を作り出そうという熱意を持ち、様々な困難を切り抜けながら前進している新世代の映画人たちの、日本初公開作品を含む新作をこの機会にぜひ発見してください。またこの特集ではフランス映画の中で(再)発見すべきクラシック作品、作家も紹介してきました。今回は「フランス映画の呪われた作家」、ジャン・グレミヨンの『燈台守』と、ジョルジュ・フランジュの初期長編作品『壁にぶつかる頭』を上映いたします。

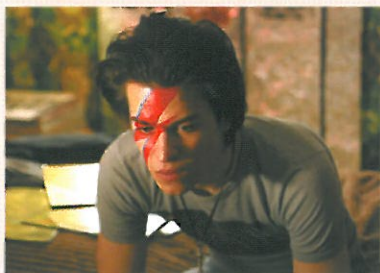
さらに3月16日にはフランコフォニー祭にちなみ、若者の姿を描いた2本のケベック映画を上映いたします。

※この特集はアンスティチュ・フランセ日本の他の支部、東京、関西、九州に巡回予定です。  
 東京：1月17日(金)～2月16日(日)・・・会場：アンスティチュ・フランセ東京  
 関西：2月15日(土)・16日(日)・・・会場：京都シネマ  
 福岡：2月8日(土)・9日(日)・11日(火・祝)・・・会場：KBCシネマ1・2  
 La circulation de ce programme est prévue à Tokyo, Fukuoka et dans le Kansai.  
 Tokyo : du 17 janvier au 16 février  
 Kansai : les 15 et 16 février au Kyoto Cinéma  
 Fukuoka : les 8, 9, 11 février au KBC Cinéma de Fukuoka

**ケベック映画特集(フランコフォニーのお祭り)**



**Wow** Wow de Claude Jutra  
 [1969年/カナダ/95分/カラー/DVD/日本語字幕]  
 監督：クロード・ジュトラ  
 出演：ダニエル・バイユ、ビエール・シャルバンティエ、フィリップ・デュベ、デイヴ・ゴールド、マルク・ハーヴェイ  
 60年代末のケベックで、夢や悩みごとを抱えた若者たちの姿を追った長編ドキュメンタリー。3人の少女と6人の若者が登場する。時として私たちの思い描く若者の姿とは異なる、等身大の3人の少女と6人の少年たち。ドラッグ、恋愛、セックス、自由、権威、社会的衝突などが彼らの会話に登場する。社会に異議を唱える若者たちは、そのよりどころをどこに求めるのだろうか。いつまで社会問題に積極的に関わることを拒否し続けるのだろうか？彼らは自由であることの責任を引き受ける決心をするのだろうか？本シネクラブでも『僕のアントワーン叔父さん』を紹介した、カナダ・ケベックを代表する映画作家クロード・ジュトラ監督のドキュメンタリー映画の傑作。



**C.R.A.Z.Y.** C.R.A.Z.Y. de Jean-Marc Vallée  
 [2005年/カナダ/127分/ブルーレイ/日本語字幕]  
 監督：ジャン＝マルク・ヴァレ  
 出演：ミシェル・コテ、マルク＝アンドレ・グロンダン、エミール・ヴァレ、ダニエル・ブルール  
 1960年12月25日に5人兄弟の4番目の息子として、ケベックの平凡な家庭に生まれたザック。ピンク・フロイドやローリング・ストーンズやデヴィッド・ボウイに傾倒し、女の子の気を引くためにバイクに乗ったり、隠れてドラッグをしたり、しかし他の男兄弟と同じことをしようとしても違和感を感じたりもしている。彼が少年から大人になっていくまでの悲喜こもごもを、ユーモアを込めて語る。  
 2006年ジュトラ賞で作品賞、監督賞、脚本賞、男優賞を含む14部門で受賞をし、本国カナダをはじめ各国で大ヒットし、当時社会現象にもなった本作を日本語字幕付き上映します。



**キング・オブ・エスケープ** Le Roi de l'évasion d'Alain Guiraudie  
 [2009年/フランス/93分/カラー/35ミリ/日本語字幕]  
 監督：アラン・ギロディー  
 出演：リュドヴィック・ベルティヨ、アフシア・エルジ、ビエール・ロール  
 農機具のセールスマンであるアルマンは43歳。独身のゲイで、人生にうんざりしていた。ところが、生意気な10代の少女カリリに出会い、彼は異性愛者となる。さまざまな人々に追われ、あらゆる危険に抗いながらも、ふたりは許されない愛を貫こうとする。しかし、これは本当にアルマンが夢見たことなのだろうか？  
 奇天烈な内容と独自の世界観で孤高の地位を築くA・ギロディー監督の新作。人間にとってのセクシャリティとは何かを問い、全く自由な発想と映像で観客を新たな映画体験へと誘う。カンヌ国際映画祭監督週間部門出品作品。



**湖の見知らぬ男** L'Inconnu du lac d'Alain Guiraudie  
 [2013年/フランス/97分/カラー/DCP上映/英語字幕]  
 監督：アラン・ギロディー  
 出演：ビエール・ドイラドンジャン、クリストフ・パウ、パトリック・ダスマサオ、ジェローム・シャバット、マチュー・ヴェルヴィッシュ  
 ある夏、湖のほとりに隠れた男たちのハッテン場で、フランクは、ミシェルに恋をした。美しく、力強く、危険なミシェル。ある殺人事件を目撃してしまったフランク。その事件にミシェルがかかわっているのでは、という疑問を持ちながらも、彼への情熱を生きようとするが…。  
 2013年カンヌ国際映画祭「ある視点」部門で上映され、絶賛され、世界的にも高い評価を得ている鬼才アラン・ギロディーの長篇4作目。  
 ◆『湖の見知らぬ男』はおそらくアラン・ギロディーのもっと美しい作品である。編集を抽象化し、視線や場所、距離の戯れを見せるその方法によって、ギロディーはこれまでにない見事なデクパーージュの技法に到達している(…)時代のあらゆる定義づけを超えて、本作は神話的次元に到達している。——ジャン＝セバスティアン・ショーヴァン、「カイエ・デュ・シネマ690号」



**壁にぶつかる頭** La Tête contre les murs de Georges Franju  
 [1959年/フランス/95分/モノクロ/DVD/日本語字幕]  
 監督：ジョルジュ・フランジュ  
 出演：ジャン＝ビエール・モッキー、アヌーク・エーメ、ビエール・ブラッスール、シャルル・アズナヴール  
 高名な弁護士ジェラヌ氏は、反抗的で情緒不安定な息子のフランソワを精神病院に入れた。フランソワは、伝統を重んじる院長のヴァルモン医師と、現代的なメソッドを採用するエムリー医師の対立を目の当たりにする。精神病ではないフランソワは、癲癇患者のウルトゥヴァンとともに病院から逃げ出すが…。



**燈台守** Gardiens de phare de Jean Grémillon  
 [1929年/フランス/82分/モノクロ/35mm/サイレント] \*東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵作品  
 監督：ジャン・グレミヨン  
 出演：ジェニカ・アタナジウ、ガブリエル・フォンタン、ヴィタル・ジェイモン、ポール・フロメ  
 ブルターニュ地方の海沿いの小さな村に住む燈台守の父と息子は一ヶ月の間、女たちのもとを離れ、海の上での任務に就く。婚約者のいる息子イヴァンにはとくに別れがづらい。そのイヴァンが狂犬病を発症し、苦しみ始め、徐々に父親に対して攻撃的になっていく。海はどんどん荒れ始め、父は、息子の攻撃をかわしながら、遭難船を救うために灯をともさなければならない……。海、地上、男たち、女たち、光、闇、それらのコントラストが本作に宇宙的な広がりを与えている。脚本は『外人部隊』(1933年)『ミモザ館』(1934年)などで知られるジャック・フェデーが担当。  
 ◆グレミヨンは事後の映画作家である。不幸が起こった後、人間がどのようにそれを生きていくのかを描く。『燈台守』、『父帰らず』、そして『愛慾』でも殺人はほとんど見せられない。しかし『燈台守』において、息子の死後、扉を風が強たたき続けている間、父親は虚空を見つめ、その横顔からは錯乱した様子が伺える。扉を打つ風の音が繰り返され、非常に現代的な編集によって父親の顔がクローズアップになる。誰もいない目の前を見つめ、今さっき犯してしまった自分の行動に震えている。——ステファン・ドゥロルム、「カイエ・デュ・シネマ 693号」



**公共のベンチ(ヴェルサイユ右岸)** Bancs publics (Versailles Rive-Droite) de Bruno Podalydès  
 [2009年/フランス/115分/カラー/デジタル/英語字幕]  
 監督：ブリューノ・ポダリデス  
 出演：カトリーヌ・ドヌーヴ、ドゥニ・ポダリデス、オリヴィエ・グルメ、ジュリー・ドバルデュー、ティエリー・レルミット  
 リュシーが会社にやってくると、向かいの建物の窓に「独身男」という黒い垂れ幕が下がっていた。これは冗談なのか？心の叫びなのか？誰かが助けを求めているのか？リュシーと同僚は真相を究明する決意をするのだが…。  
 ◆ポダリデスの作品は、ジャック・クチの映画の伝統を引き継ぎ、喜劇の中に詩情が溢れている。そして、よりいっそうパーソナルな自由がある。オリヴィエ・グルメ、ブノワ・ポールヴールドラをはじめとする、豪華な顔ぶれの仲間の俳優たちが映画に花を添える。パレスクな調子と、まれに見る的確さで描かれた感受性溢れる映画に。



**7月14日の娘** La Fille du 14 juillet d'Antonin Peretjatko  
 [2013年/フランス/88分/カラー/ブルーレイ/日本語字幕]  
 監督：アントナン・ペレジャトコ  
 出演：ヴィマラ・ボンズ、ヴァンサン・マケーニユ  
 7月14日、勤務先のルーブル美術館でトリュケットという娘に出会ってからというもの、エクトルの頭には彼女のことしかない。彼女の気を惹くには、やっぱり海に誘うのが一番。トリュケットの友達シャルロットも一緒となれば、エクトルの友人パトールも大賛成…。シャルロットの弟ベルティエも仲間に加わって、いざ出発！海をめざしてフランスの田舎道を進む一行。しかし彼らのほかに車はない…。という、世の中は経済危機のただ中にいるから。そんな夏、政府はバカンスを1か月短縮することを決定し、国民に早々に仕事を再開するよう要請した。何やらしつちやかめっちゃか、札束も飛び出して、グループは離ればなれに。まるでバカンス7月派とバカンス短縮のせいで休みに出られず嫉妬かられる8月派とで二分化してしまったフランスそのもの。残されたエクトルたち3人組は、仕事がんばら！とばかりに、「7月14日の娘」を取り戻し、楽しくだらけた夏休みを満喫することを決め込んでいるが…。2013年カンヌ映画祭監督週間出品作品。  
 ◆本作は喜ばしい成功であるだけでなく、最近のフランス映画では放棄されていた領域に果敢に踏み込んでいる。それは非自然主義的コメディという領域である。——シリル・ベガン、「カイエ・デュ・シネマ」